

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

留学生の「学び」を支える日本語教育

—日本語学校を媒介とした教師と学生の共構築の物語から—

平澤 栄子

2014年9月

序章 私にとって修士論文を執筆する意味

本研究は、「私が今まで行ってきたことは、日本語教育なのだろうか」という自らの漠然とした疑問から出発していること、また、自らの「実践」と「研究」における葛藤について触れ、修士論文を執筆する作業を私にとっての「実践研究」とする理由を述べた。

第2章 なぜ日本語教育のあり方に疑問を感じたのか

自身がなぜ日本語教育のあり方に疑問を感じたのかを、私が長年関わった実践現場である日本語学校のおかれた状況を中心に、自身の日本語教育の捉え方を探った。私が「日本語教育」と言ったとき、それは日本語教師としての私が理想としていた「日本語教育」を指しており、「日本語能力とコミュニケーション能力を兼ね備えた有能な人間を育成する」というものであった。一方で、私個人が目指していたものは、私が「日本語教育」と見なしていなかったボランティア教室で体現していたものであり、社会的な活動であった。このような捉え方が自らの葛藤を生み、日本語教育のあり方に疑問を感じる一因となっていたと考えられる。

第3章 なぜ「学び」に注目するのか

本章では、「学び」に注目した理由を先行研究のレビューを通して述べている。はじめに、学校教育における「学習観」について述べ、学校教育で培われた「個体能力主義」の能力観（石黒, 1998）が自らの「教育観」に影響を与えていたことに触れた。さらに、日本語教育における学習観の変遷を追い、「日本語能力」や「コミュニケーション能力」を個人が獲得すべき能力であるとする考え方が依然として主流であり、学習観にも影響していることを述べた。

次に、個人の能力によらない「学習観」として、状況的学習論に触れた。ここでは、レイヴとウェンガー（1993）の「正統的周辺参加論」を中心にレビューし、参加における学習を捉えるのであれば、複数の実践コミュニティに同時に参加している個人を捉える必要があること、個人と実践コミュニティの関係を見るのであれば、個人を捉える多面的な視点と実践コミュニティを作り出す構造にも着目すべきであること、さらには、実践コミュニティや地域ネットワークが生み出す「日々繰り返される人々の関係構築の営み」（高木, 2003）を学習として捉えるべきであることを述べた。

このような学習観に基づき、改めて留学生活における「学び」に注目し、その生活の実

態から丁寧に「学び」を考察する必要があることを述べた。そこで、本研究では社会文化的アプローチの観点に立ち、留学生の「学び」の実態を、組織の関わり方も含めて包括的に捉えることにした。そこから「学び」を支える日本語教育のあり方を考察するため、以下の2つの問いをたて、それぞれにリサーチクエスチョン（以下 RQ）を設定した。

1. 調査フィールドである日本語学校はどのような場だったのか

RQ1：日本語教師として勤務していた調査者は日本語学校をどのように捉えているのか

RQ2：日本語学校卒業生である調査協力者は日本語学校をどのように捉えているのか

2. 調査協力者は日本語学校在籍中と卒業後にどのような「学び」を得たのか

RQ3：調査協力者は、日本語学校在籍中にどのような「学び」を得たのか

RQ4：調査協力者は、日本語学校卒業後にどのような「学び」を得たのか

第4章 研究方法

フリック（2011）やメリアム（2004）の述べる「社会現象のあり方を探求する」という質的研究法の意義に則り、本研究を質的研究法という枠組みの中で行われる「実践研究」として位置づけた。また、私が勤務してきた日本語学校をフィールドとし、教師と学生という関係性のもと「語る」という言語行為も含め共構築された「ナラティブ＝物語」を分析対象とし、研究の軸とした。また、信頼性と透明性を担保するため、本研究ではトライアングレーションを用いた。具体的には、自身のレポート等をもとにした自己エスノグラフィー、調査フィールドの観察、卒業生への半構造化インタビューを行った。

調査協力者は、調査フィールドの森日本語学校（キスゲ市）の卒業生「ハル」である。2011年4月同日本語学校入学、2013年3月卒業。日本語学校卒業後、県内の短期大学看護学科（若松市）に進学し、インタビュー当時1年生に在籍していた。ハルとのインタビューは、2013年11月2日と2014年1月3日の2回、計3時間34分間行った。また、分析は、細かく切片化することはせず、いかに語られたかに焦点をあて分析をした。

第5章 教師と学生の共構築の物語

5.1.では、RQ1に基づき、森日本語学校の卒業式を観察し得られたデータから、森日本語学校の特徴として次の2点を挙げた。1点目は、地元企業だけでなく、関係団体との関係を築き、ゆるやかに地域社会とつながることにより、公式な団体にはない自由度が保たれた組織として機能していること、2点目は、最長2年間、同じクラスメイト、担任教師

で運営される枠組みができていたことから、卒業までにクラスの結束力が高まり、強い絆が生まれていることを挙げた。以上の観点から、森日本語学校は地域社会の一部に組み込まれており、そこでの教室も複雑な人間関係を伴った社会の一部として機能していたのではないかと考察した。

5.2.では、RQ2に基づき、ハルにとっての日本語学校とは何かを、インタビューデータをもとに考察した。ハルは、日本語学校を<日本にある実家>だとし、組織としてではなく、教師個人とのつながりを中心に語っていた。また、日本語教師については「日本語を教える」という役割よりも、職務を超えた一人の人間としてのつながりが中心に語られた。つまり、「教師」や「学生」という立場を超えた一人一人の関係が、ハルにとっての<実家>という場を創っていたと考えられる。

5.3.では、ハルにとってのアルバイトとは何かを分析し、次の2点を考察した。1点目は、アルバイト企業へのアクセスの難しさである。キスゲ市内においては、それほど、苦勞することなく、アルバイトを見つけているが、若松市においては、アルバイト探しに苦勞している。このことから、留学生が一個人として組織にアクセスする難しさを指摘した。また、一旦アクセスに成功すれば、それまでの経験を活かし、アルバイト先での役割の重要度を高めていくことができた。2点目として、ハルはアルバイトを次々と変えながら、より日本語を必要とする職種に変えることによって、仕事における役割の重要度を高めていった。つまり、ハルにとってのアルバイトとは、日本語を使用する社会への参加の仕方を学ぶ実践の場であったと言える。

5.4.では、ハルの人との関係構築のあり方を分析考察した。ハルは、森日本語学校在籍中は、それほど人間関係に苦勞することなく、自由に人とのつながりを広げている。一方、短期大学に進学してからは、人間関係に悩み、日本人のグループに<入れない>と感じていた。しかし、関係を模索するなかで気持ちを切り替え、自分自身を肯定的に捉えることによって<入れない>という気持ちはなくなっていった。この過程から、人と人をつなげるとは、集団やグループに入るのではなく、人との関係のあり方を編み直しながら、そのつながりを太く確かなものにしていくことであると考察した。

第6章 留学生の「学び」のあり方を考える

本章では、RQ3、4に基づき、4つの「学び」に焦点を当てて考察した。まず、「参加における『学び』」では、レイヴとウェンガー（1993）の「正統的周辺参加論」を中心に4

つの観点から考察した。1つ目は、ハルの参加における「学び」を単一の実践コミュニティから捉えたとき、徐々に実践コミュニティへの中心へと自身の価値を高めていく様子が確認できた。2つ目は、「学び」を複数の実践コミュニティへの参加という観点でとらえたとき、そこには、複雑な人間関係があり、「参加」という概念だけでは捉えることができないことを指摘した。3つ目は、実践コミュニティの「学び」という観点で捉えたとき、学生たちのアルバイトにおける日々の実践によって、アルバイト企業自体に新たな秩序が生まれ、実践コミュニティ自体を動かす学びへと発展している様子を窺うことができた。つまり、「学び」は個人の内部だけで起こるものではないと考えることができる。4つ目の観点としては、ハルの留学生生活を包括的に捉えたとき、アルバイトを変えながら役割を変化させていったプロセス自体が、日本社会への参加の度合いの増加をもたらした「学び」と捉えられることを指摘した。

次に、「関係構築における『学び』」として、2つの観点から考察した。1つ目は、ハルが森日本語学校を媒介とした地域とのネットワークの中で、人と人をつなぐ一人の媒介者となっていた点について指摘した。ハル自身もネットワークの参加主体となることによって、人とつながることの恩恵を経験的に学んでおり、人とのつながりは「入る」という感覚を伴うものではないことを述べた。つまり、「参加」という概念だけでは「学び」を捉えることができない。そこで、「関係構築」とは何かを掘り下げて考察した結果、他者との関係を捉え直す際、その視点はハル自身に向けられていたことを指摘し、他者との関係を捉え直しながら、自分を捉え直すことが「関係構築における『学び』」であることを述べた。

以上の2つの「学び」から「自分自身の捉え直しにおける『学び』」は、それだけで独立したものでなく、「参加」においても、「関係構築」においても、自分自身の価値や価値観を問い直すものであり、わけて考えることができないことを述べた。

最後に、これらの「学び」から、「ことばの学び」とは何かを考察した。アルバイトへの参加の過程から「ことばの学び」を捉えると、ハルは「仕事」と「ことば」を包括的に捉えており、アルバイトの経験そのものと「ことば」とを切り離して考えることはできなかった。また、ハルが「ことば」を問題にしたのは、クラスメイトとの関係をうまく築けなかったときだけであった。これらの例から「ことば」は、日々の生活において他者との関係性の中に埋め込まれており、「ことば」だけを取り出して、「習得した」とか「学んだ」ということはできないと考察した。

第7章 留学生の「学び」を支える日本語教育とは

本章では、はじめに「学び」を支える日本語学校の役割をアクセス面での支援という観点で考察した。この場合のアクセスは、「参加」という観点から、ある特定の集団へのアクセスに限定して考え、制度的に組織化された集団（以下「社会組織」と特定の実践も持たない「私たち」と言い表せるような連帯感をもつグループ」（三代, 2009）（以下「コミュニティ」）にわけて論じた。

「社会組織」へのアクセスについては、川村（2003）の「ネットワーク組織」の論考が有効であると考えた。森日本語学校では、教職員や学生がこの「ネットワーク組織」の参加主体として、人と人をつなぐ媒介者となっていたことに意味があると考えられる。これは、日々の実践の長い間の積み重ねによってできたものであり、このようなネットワークが張り巡らされることによって、学生の地域における正統性を保障し、社会組織へのアクセスを可能にしたと考えられる。

「コミュニティ」へのアクセスについては、「参加」という観点よりも、むしろ、「関係構築」という観点での支援が有効でないかと考察した。ハルはキスゲ市において「入る」という感覚は持ち合わせておらず、自由に人と人をつなげていた。ネットワーク組織の参加主体となるとは、意識を外に開き一人一人との関係を構築しながら人をつなげていくことを意味し、コミュニティへの参加を考えるなら、関係構築に目を向けるべきである。

この関係構築における支援を組織という観点から考えると、地域社会における日々の生活の中で、教職員や学生が、参加主体となって他者との折衝を繰り返すこと自体が、結果的にネットワーク組織として機能すると考えられる。また、このような日々の折衝が組織の枠組みや地域全体のあり方をも捉え直すような学びへと発展する可能性がある。

また、留学生の「学び」を支える教師の役割という点で考えると、これまでに考察した「参加における学び」「関係構築における学び」「自分自身の捉え直しにおける学び」をどう教室活動に活かすかが重要であると考えられる。三代（2009）は、関係構築において「この私の関係」が重要だと指摘する。しかし、関係構築においては「この私」よりむしろ、「この他者」の存在が重要であると考えられる。学生にとって他の誰でもない「この他者」に教師がなり、さらに、「この他者」としてクラス全員が存在し、その関係を育んでいくこと、つまり、日常における「この他者」との折衝によって、それぞれがクラス・コミュニティへの参加における役割を模索していくことができるようになる。このとき、はじめて「学び」が育まれる「実社会」となり、教室が社会の一部として機能すると考察した。

最後に、留学生の「学び」を支える日本語教育として、次の2点を主張した。まず、「学び」は、「参加」によって自らの役割を変えていく過程や、他者との関係の編み直しを行う過程において、自分自身の捉え直しとともに同時進行的に行われるものであり、他者の存在がなければ「学び」は起こり得ない。また、「ことば」だけを取り出して、「ことばの学び」として扱うこともできない。つまり、日本語教育において「学び」を考えるのであれば、「ことば」のやりとりを通して他者を意識することにより、関係の編み直しや自分自身の捉え直しが促されるような実践のあり方を探るべきである。

次に、「学び」は教室の中だけで起こるものではない。日々の実践により、教室や組織のあり方、ひいては地域社会のあり方に新しい秩序をもたらす可能性のあるものであり、そのためには、教師も学生も一人ひとりがその教室や組織のあり方を変え得る主体となることを意識するべきである。

【参考文献】

- 石黒広昭 (1998). 心理学を实践から遠ざけるもの—個体能力主義の興隆と破綻. 佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭 (編)『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会, 103-156.
- 川村尚也 (2003). 異文化間教育のための地域ネットワークングにおけるキーパーソンの役割—組織論の視点から『異文化間教育』18, 47-59.
- 高木光太郎 (2003). 「学習」としての地域ネットワークング『異文化間教育』18, 60-67.
- フリック, U. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) (2011). 『新版 質的研究入門—<人間の科学>のための方法論』春秋社. (Uwe Flick. *Qualitative Sozialforschung*: Verlag GmbH. 1995).
- 三代純平 (2009). コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から—『早稲田大学日本語教育研究』6, 1-14.
- メリアム, S.B. 堀薫夫・成島美弥 (訳) (2004). 『質的調査法入門—教育における調査法とケーススタディ—』ミネルヴァ書房. (Merriam, S.B. *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*: John Wiley & Sons, Inc. 1998.)
- レイヴ, J. & ウェンガー, E. 佐伯胖(訳) (1993). 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書 (Jean Lave & Etienne Wenger. *Situated Learning –Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press. 1991).